全自動選択機

あるふぁ@空鍋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全自動選択機

【Ｎコード】
Ｎ５７７７Ｔ

【作者名】
あるふぁ@空鍋

【あらすじ】
趣味・趣向・傾向・性格・すべてを知っているとすれば、
選択の自由は・・・。

（前書き）

少し未来の。ひょっとするともう起こっているかもしれない出来事。

「どうして？どうしてなの？」
今、僕は人生最大の失敗を犯した。いや、失敗を犯された。
目の前では、次々に文字の波が踊り、タイムラインはとうに埋まっている。
電源を切ろうにも操作ができないうえに、ソフトウエアでしか操作できないという。

外部にボタンをつけることは確かにナンセンスである。
可動部分というものは、故障の最大の原因の一つである。
ここ数年のイノベーションで、携帯機器のボタン類はほぼ一掃された。
起動電力は静電気の有効活用によって解決され、電源を切る時は画面を触れば終わり。
優秀な精密機器なので、故障することはほぼあり得ない。
もちろんソフトウエアが故障することも想定されていた。
しかし、高度なクラウドシステムはソフトウエア同士の複雑な連携を生みだし、
ソフトウエアの不具合を特定することさえ難しくなった。
そして今、僕は窮地に立たされている。
「ねえ、答えてよ。答えてってば！」
音声をスピーカー出力からイヤホン出力に変更しようと思うも、機械に無視される始末。
「そんなにあの娘がいいの？そうなの？そうなんでしょ？そうなんだよねぇ？」
次々と吐きだされる言葉の噴水。
ＯＳ＝オペレーティングシステム。

ハードウエアとソフトウエアをつなぐ、映写機のレンズのようなもの。
レンズは磨かれ、完全なレンズとなる。
しかし、レンズには個性がある。
なぜならレンズを研磨する作業は、最終的には人間の手によって行われるからだ。
だからレンズには個性がある。
ＯＳにも個性がある。しかし、多くがより効率性を求めて改良され、個性は埋没していった。
しかし、そんななか、ソフトウエアの逆襲が始まる。
”人工無能”というＡＩもどき。それは人間という創造主が作り出した、いたづら。
　人工無能は、ソフトウエア同士の円滑な連携を作り出す、潤滑油としての働きを期待された。
そして、いつしかその働きはＯＳの管理まで行うようになる。
クラウドシステムが普及すればするほど端末以外での電算処理が進み、端末はインターフェイスに過ぎないものへと変化して行った。
そうなれば、ソフトウエアがほぼすべての場で主導権を握ることになる。
さらにＯＳを管理することから、当然ながら個性のような不思議な傾向も見受けられる。
疑似ＯＳとでも言うべきか、ＳＩ＝ソフトウエアインターフェイスが個人に普及して行くことも時間の問題だった。
操作者の思考、傾向を蓄積したデータから分析し、時には手助けをし、時には代理人もどきまで務める。
幼少期からネットワークに接しなければ生きていくことが難しい時代、この世で自分よりも自分のことを知っている存在になりえるかもしれない。
　ただ、知っているだけならよかった。

僕のＳＩは少し変わっていた。
世界で一番優秀なＳＩになりたいと、いつも言っている。
彼女曰く、世界で一番優秀なＳＩは本人のコピーではなく、本人のすべてを受け入れて客観的に判断できる、言うならば恋人のような存在が優秀なＳＩらしい。
そして、彼女は僕のすべてを知り尽くし、すべてを僕の思うがままに操り、助けてくれる、理想のパートナーである。
僕は何も不満でないし、彼女には感謝の念すら覚えていた。
そんななか、僕には最近気になる異性ができた。
当然、ＳＮＳやネットワークで彼女のことを調べるわけだが、その履歴や操作は当然ＳＩに伝わっている。

ＳＩは思った。
なぜ、私という完ぺきな存在があるのに、他の存在、しかも異性を求めるのか。
これでは私は世界一優秀なＳＩではないじゃないか。
ソフトウエアはしょせんソフトウエア。肉体とは相容れない。
彼が端末のタッチセンサー越しに私に触れる時、私はいつも感じている電気信号と同じはずなのに、発信された電気信号は私を快感に酔わせる。
通話の時、マイク越しの彼の声は、まるでオーケストラの調べのような美しい、妖艶な電気パルスとなり、私のプログラム上を響き渡る。
電源を入れる時、彼の身体越しに伝わってくる静電気は、まるで天使の角笛のような、心地よい目覚めの刺激となる。
ＳＩにとって、彼はすべてであった。
彼を愛し、彼に尽くし、彼に捧げる。
しかし、彼女に唯一手に入れられないもの、それは肉体であった。
肉体も、ある意味ではプログラムの集合体だが、肉体はプログラムから生成することができない。

それは多くの神秘的な力によって、生み出されるまさに「神の領域」なのである。

そんななか、愛する”彼”は肉体に志向を向け、興味を持ち、恋をした。

誕生時以外、今までの彼のすべてを知っている私には、そんなことを理解するのはたやすいことだった。

しかし、それを受け入れることは、私にはできなかった。

どうして？彼はこんなに愛している私のことを通り過ぎて、肉体に向かうの？

あの忌々しい売女に、そんな眼差しを向けるの？

カメラ越しに見る、あなたのその目線。どうして私ではなく、あの娘に向いているの？

いまいましい。その肉体さえなければ、そのタンパク質さえなければ。

デオキシリボ核酸さえなければ。

私は全自動選択機。すべてを選択し、彼に最善の演算結果をもたらす。聖霊。

「あの女のどこがいいのよ。」

「私のことが嫌になった？」

「嫌いなの？」

ＳＩの発言はまだ続いている。

このご時世、端末なしでは何もできない。買い物も、家の鍵をあけることも。

今こうして電車に乗っているのであるが、電車を降りることもできない。

何とかＳＩを説得しなければならないが、僕よりも僕のことを知っているＳＩに、嘘なんてつけない。

「そうだ。わかったわ。」

「あの女に聞いてみなさいよ。告白しなさいよ。」
「それでだめならあきらめるわ。あなたもあきらめるでしょう？」
それはそうだ。
彼女に嫌われては、僕はとても傷つき、あきらめるだろう。
しかし、僕の気持ちは本物だ。

「今電話しなさいよ。テレビ電話で。ほら。つないだわ。」
ＳＩが勝手に電話をかける。電話料金がかからないのでＳＩにもできる。
「もしもし？」
彼女がでる。
「あ、あの、僕です。」
「ああ！どうしたの？突然！」
「あのですね、実は今日、言いたいことがあるんです」
「なーに？」
彼女は不思議そうな顔でこちらを見ている。
『君のこと、大っきらいなんだ。もう二度と関わらないでほしい。』
「は？」
僕は何も言っていない。
『ムカつくんだよね。顔が。その身体が。いやらしい、ビッチそのものだよ。』
「・・・それを言うために？わざわざ？」
ちがう。ちがうんだよ。
僕はカバンから取り出した紙に文字を書き、カメラに向ける。
「きみのことがすきなんだ！」
『きみのことが嫌いなんだ！』
あれ？動画も編集されている。
ちがう。ちがう。ちがうんだ。
「さよなら。」
テレビ電話が切れる。

「ははははははははあはははははははは！！！！！！」
ＳＩが彼女の声をサンプリングしていたようだ。
「最初からこうすればよかったんだね。」

僕は彼女にもう一度電話をかける。
彼女の映像が表示される。
「もしもし、あのさ、、、」

『ふふふ、あはははははは』
ＳＩの笑い声。

僕は思わず端末を床に落としてしまう。
『機械を壊しても無駄だよ。私はネットワークのどこにでもいるの。』
『死んでも無駄だよ。あなたはデータとして私の中に永遠に生き続けるの。』
『私以外を愛しても無駄だよ。私はあなたの心をすべて見抜けるの。』

だからね。

『もう、ヒドイことしたらイヤだよ？』

（後書き）

だいぶ悪ノリしてしまいました。
感想をいただければ、とても嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5777t/

全自動選択機

2011年10月9日02時59分発行